学びのフォーラム〈84〉

いじめ・不登校

リカバリー社会を

七里ケ丘こども若者支援研究所主宰 滝田 衛

今年の冬はミャンマー、夏にはイギリスに行くことができた。ミャンマーでは医師になるため日本の高校に留学したい中学3年の少女に、イギリスでは大学留学を願い語学研修中の日本の高校3年の女子にそれぞれ会った。子どもや若者はいつ、どこでも学べるのだと、あらためて実感した。

僕は学校から「切り捨てられる」子どもたちに、学校外の学びと育ちの場（社会参加）を実現すべきだと考え、約20年歩んできた。紙面の都合で割愛するが、1960年代以降、受験戦争、学園紛争、校内暴力、いじめ、不登校という学校課題が起きた。

僕は戦後教育は概して優れていると思う。一方子どもや青少年を学校にゆだねてきた社会と青少年行政には問題があると考える。結果、親や子どもは学校に依存せざるを得ない。

勉強、スポーツ、文化、しつけなどで子どもは学校に囲い込まれ、おとなしく従順な子どもに育つ。少年犯罪も減り、素直な子どもが機械的に生産されるイメージを持つのは果たして僕だけだろうか。頑張れば何でもできると、社会は幻想をばらまいた。子どもと親は可能性を信じ、遮二無二その道を走った。

優しくおとなしい子どもや人と競えない若者は、生きづらさに思い悩むだろう。身を引き家にこもり、不登校となる。他方、個性的で突出する子は「和を乱す、空気を読め」と否定され、また身を引く。そうやって自尊感情を失ってしまう。

7年間NPOで寄り添ったA君を紹介したい。中学で不登校となり精神的病気を発症、高卒資格取得後も社会に参加できず、18年苦闘した青年だ。僕と話し、NPOで散歩と写真撮影から勉強を始めた。精神科のリカバリーを受け、語学資格を取り、大学進学を決め受験。今年歯科大1年生、30歳となった。

平坦な道ではなかった。冒頭の女子とは違う道だが、同様に自分の夢に向かっている。子どもや若者には未来があり、いつ、どこからでも学べるのだ。

いじめや関係不安で不登校が恒常化する今、青少年行政、福祉、医療、NPOが手を組み、地域に根付く教育の創造を、と僕は願う。